

---

# クローン病に負けるな！

生時（レジェンド）

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クローン病に負けるな！

### 【Nコード】

N3698Y

### 【作者名】

レジホン下  
生時

### 【あらすじ】

この作品は「病氣と闘う人たち」の続編です。

ですから、「病氣と闘う人たち」を先に読んでください。

## 第1話 クロロン病（前書き）

あらすじでも書きましたが、この作品は「病気と闘う人たち」の続編です。

## 第1話 クロロン病

2010年春……

秀二が自伝「生きる時」を書いてから、1年近くの時が流れていた。彼は自伝の最後のメッセージに、自分自身のためにも、「忘れるな生きてくても生きれない人がいることを」と書いた。だが、クロロン病の痛みや不安、恐怖などに、また負けていた。

クロロン病……消化器の病気で、口から肛門、主に小腸や大腸に潰瘍ができたりし、狭窄つまり、腸が細くなったり、ろう孔と言って腸に穴が開いたりする。

主な治療は点滴による絶食や薬物治療、そして外科的治療である。食事は非常に難しく、食べるよりエレンタールやラコールという栄養剤が点滴で生活した方が再発しにくい（だが、個人差はあり、栄養剤だけで生活していてもすぐ再発する人もいるし、暴飲暴食をしても何年か平気の人もいる）薬物治療として、プレドニン（ステロイド）やレミケードという免疫抑制剤が使用される（薬ということでは、個人差はある）

また、非麻薬系の強い痛み止め（ソセゴンやレペタンなど）を使用する事が多く、薬物中毒になる患者もいる。

さらにネット動画で、大麻を必要というデモまで起きている。原因は不明であり、欧米の方に患者が多い。（だが日本でも近年クロロン病患者は増えている）クロロン病の名前はブリル・バーナー・ド・クロロンという内科医が発見した事から、クロロン病と名づけられた。そのため日本ではクロロン氏病ともいう。

ちなみにアメリカ合衆国34代目大統領アイゼンハワー氏もクロロン病だった。

また、映画「ポルターガイスト」でキャロル・アン役を演じたヘザー・オルークもクローン病患者である（彼女は12歳で謎の死を遂げている。さらにこの映画のキャスト4名（彼女を含む）と、監督一人が亡くなっている）

若い時期に発病しやすい（人によっては50代になってから診断された患者もいる）

今でもまだマイナーな病気であるが、10年以上前はさらにマイナーな病気で、病院でもクローン病と診断されず、誤診を受けた患者も珍しくない。

そのための腹痛、嘔吐、高熱、体重減少などの症状が現れたら、地元でもそれなりに大きな病院で検査をしたほうがいいかもしれない。

（生時が作成したニコニコ大百科より抜粋）

「どうして俺ばかりこんな目に……」

病気と戦っているのは彼だけではない。

そのことは彼自身が一番良く知っている。

だが、今の彼はその事を忘れていた。

「生時、そろそろ仕事の時間だろう」

父親が、生時を呼びに部屋に入ってきた。

彼は3年前から映画館で仕事バイトをしている。

はじめは痛みはあるものの、調子もまあまあだったので、「映画の世界の案内人」などと言って、喜んで毎日仕事をしていた。

だが、痛みが強くなったりする時などは、休んだり、早退したりしていた。

そのため、人件費削減もあり、ここ半年はろくにシフトが入っていない。

「どうせ俺なんか、いてもいなくても同じだ」

「なら辞めちまえ」

「分かった。分かった。行くよ」

頭をかきながら彼は職場へ向かうことにした。

家を出る間に、何度も溜息をはいた。

このままでは数年前と同じ人間になってしまう。

生きるために、生きる目標を再び見つけなければならぬ。

## 第1話 クローン病（後書き）

あとがき

どうも生時です^^

実は今月いっぱい、映画の世界の案内人という仕事を辞めます。

クローン病だけが悪いわけではないのですが、今の僕はクローン病が心から憎い！

だが、負けたくない。

そのため、今の僕の思いをこの作品で書こうと思います。

生時

## 第2話 沖田一の恋

「あと20分もあるのか」

と、愚痴を言いながらも仕事をやる秀二。

「河村さん、僕は映画の世界の案内人でしょう。そう言って教えてくれたのは河村さんなんですから」

「君はいいね、若くて健康で……」

「はあ……（早く元気になってください）」

そして仕事終え、帰宅途中に1人の男性が声をかけてきた。隣には十代後半の女の子がいた。

男の名は沖田一だ。

そう、秀二が通っていた実戦空手新戦会の四天王の1人だ。

実戦空手道新戦会は館長の後藤勇（49歳）5段

その下に内弟子であり四天王と呼ばれる方たちがいる。

師範の土方歳夫（39歳）4段

指導員の沖田一（27歳）3段

同じく指導員の永倉新一（40歳）3段

同じく指導員の原田光介（36歳）3段

この4人が四天王だ。

そして指導員の神威北斗（36歳）2段

秀二の弟の秀三は初段だ。

また、潰瘍性大腸炎でありながらも格闘技を続けている内気は茶帯になっていた。

沖田の容姿は武道の達人には見え、華奢な女の子のような容姿をしていた。

また、爽やかな好青年であり、本職はビデオレンタル屋でアルバイトをしているフリーターだ。

「秀二さん、久しぶりですね」

「おっ、沖田君じゃないか」

「今仕事帰りですか？」

「まあね。ところで隣の子は彼女かい？」

「押忍！」

「秋野由紀子です」

セミロングに薄く茶色い髪をし、優しそうな感じ女性だ。

「あっ、どうも前に沖田君とこの道場いた河村秀二です」

3人はほんの少しの時間立ち話をし、秀二は帰宅した。

だが、彼女には別の顔を持っていた。

次の日の夕方19時……

この日、沖田は夜バイトがあるため、彼女は、4人の女友達と3人の男友達と一緒に。ファミレスにいた。

「由紀子はいいい金蔓が二人もいて。いいな〜」

「いいでしょう。私のためなら何でも言う事を聞くんだから」

なんと、沖田の前では猫を被っていたのだ。

「おいおい、俺も由紀子おまえの金蔓か？」

「違うよ〜。新見君が彼氏で沖田はパシリ君だからね」

しかも新見という男までいた。

「でもさ〜、空手やっているんでしょ。強いのか？」

「女みたいな男だよ」

そう言って、彼女は皆に携帯に保存されている沖田の写真を見せた。

「うわ〜。弱そう。新見君にすぐやられそう」

「それ、マジ受ける」

「沖田あいつが今バイトしているのは私のため。今度は何を値だろっかな〜」

だが、この話を二人の男性が聞いていた。

「あの女あま」

「落ち着け。本当に沖田の彼女なのか？」

「この前、一から写真を見せてもらいました。間違いなくあの女です」

「そうか……」

話を聞いていたのは新戦会の土方と神威だ。

「俺が一発」

「やめる。北斗。これは沖田の問題だ。沖田あいつが真実を知って、どうするかを、俺達は見守るだけだ」

「押忍！」

次の日の夕方19時……

沖田は今夜もバイトのため、由紀子は昨日の女友達と一緒に、ファミレスに向かっていた。

昨日の男3人とはファミレスで待ち合わせしているのだ。

だが、彼女達の前に沖田が現れた。

「沖田……君」

「なんか、くだらない噂を聞いちゃって……真実を知るまで、バイトする気分じゃないんで」

「噂ってな〜に？」

「ゆきちゃん、男いるんだろう？」

「な、何言っているの」

「正直に答えてくれ！僕が怒る前に……」

しばらく彼女は黙り込んだ。

そしてこう言った。

「ふん……沖田あんだなんかが怒ったって怖くないよ」

その言葉に沖田は、拳を強く握った。

「私の本当の彼氏は新見君だけ、アンタは使いパシリよ」

「そうかい……僕は本気でゆきちゃんが好きだったのに」

沖田の目から涙が流れた。

「もういいだろう。帰れよ」

「あんま、なめた口聞くなよ」

沖田の口調が荒くなった。

その時、由紀子の携帯が鳴った。

相手は新見だ。

「遅いぞ〜」

「ご、ごめん……今沖田の奴が来て……退かないのよ」

「ああ？しょうがね〜な。桜木公園に連れて来い。俺達も向かうか

ら

「うん」

電話を切り、彼女はこう言った。

「沖田あんたの方こそ私をなめないですよ」

沖田は女達と共に公園へ向かった。

そしてしばらくすると、新見たちが現れた。

「お前が沖田か？」

沖田は何も返事をしない。

「シカトしてんじゃね〜よ」

「新見さん、コイツビビッているんですよ」

「ははっ、そうか、空手やっているから自分が強いと思っていたのか？」

「素直に謝ってくれば、誰も傷つかなかったのに」  
「ようやく沖田がしゃべった。」

「ああ？傷つくのはお前の心と体だけだ。まあ、1万払えば、見逃してやるよ」

「お前らにやる金などない！」

「ああ！ぶっ殺してやる」

「新戦会しんせんかいは館長の許可なく他流試合を禁じられている」  
「そついいながら、新見のパンチを紙一重で交わした。」

「けど、これは他流試合じゃないし、喧嘩でもない。クズどもにお仕置きをするだけ」

「おい、お前らもやれ」

「はい」

3人同時に攻撃を仕掛けてきたが、相手が悪い。

一瞬で3人は倒れた。

「い、痛て……」

「由紀子、沖田あいつ何をしたの？」

「わ、分かんないよ」

「知りたいか？」

いつの間にか男が1人、女達の後ろにいた。

「だ、誰？」

「僕の先輩だよ」

「帯はお前の方が上だけどな」

現れたのは北斗だ。

「くそつたれ〜！お前ら俺のバックにはすごい人が付いているんだぞ」

「ちょっと、黙っててくれない。この子達に沖田が何をしたか教えていから」

「ふざけるな〜！」

「まず1人は、まっすぐ突っ込んできたから、前蹴りで倒して、後ろから攻撃しようとした奴には後ろ回し蹴り、で、あの新見あほうには上段蹴りが決まったのさ」

「う、嘘……沖田あいつ人間なの？」

「さあな。北斗おれより強いから化け物なのは間違いない」

「北斗さん」

「ははっ……さて、大将、すごい人がいるんなら呼べよ」

「い、いいのか。芹沢さんは、摩利支天の14代目総長なんだぜ」

「ふ〜ん。なら、摩利支天と新戦会の戦争だな」

「北斗さん」

「冗談だよ。タダ、芹沢には俺から伝えてやるよ」

「何!？」

「摩利支天のOBとして……3代目の頭張っていた、この神威北斗が直々に伝えてやるよ」

「(ハツタリか……いや、たぶん本当だ)」

「どうした?大将?このままおとなしく帰るか?それとも俺とタイマンはるか?」

「か、帰るぞ」

「はい」

「ちょ、ちよつと、私達を置いていかないですよ」

こうして新見たちは去っていった。

だが、由紀子だけは去ろうとしなかった。

それどころか彼女は、泣きながらこう呟いた。

「ごめんなさい……私、嫌なことを忘れたくて……病氣のことを忘れたくて……」

「病氣?」

彼女の性格が歪んだのは、どうやら病氣を抱えてしまったのが原因のようだ。

沖田は謝る彼女を許すのだろうか?

第2話 沖田一の恋（後書き）

ちよつと格闘モノの話にしてみたくて……

### 第3話 修羅場

「私クローン病という病気を抱えていて、それで嫌なことを忘れてく……本当にごめんなさい」

「クローン病！」

「秀二と同じ病気じゃね〜か」

「ゆきちゃん、君が心から謝っているんだ。許すよ。それに僕の知り合い……この前立ち話した人、あの人もクローン病だから、病人には病人の健康人には分からない痛みや苦しみがある。でも、クローン病なんかには負けないで、これから真面目に生きてよね」

沖田は笑顔でそういった。

そして彼女は「はい」と答えた。

次の日、沖田と由紀子、さらに秀二と一緒にいつものファミレスに来た。

「ふ〜ん。クローン病だったんだ」

無気力な感じで秀二は言った。

「はい。それで、今は恋人じゃなく友達として付き合っているんです。で、修二さんも仲良くしてあげてください」

「ああ」

秀二は気のない返事をした。

そんな彼の顔を由紀子は見ても、何かを思い出した。

「秀二さんって、ちょっと前のCCJAPANにネット作家の体験談で出ていませんか？」

CCJAPAN……クローン病、潰瘍性大腸炎などの専門誌。出版社は三雲社である。

「ああ、出ていたよ。今は何も書いてないがね」

「小説以外にも格闘技や音楽もやっていたんですね」  
「昔の事だよ」  
「でも亡くなつた方のためにCDまで作ったんですね」  
「まあね」  
「私も、前にバンドやっていたんですよ。一緒にやりませんか？」  
「秀二は少し考え、こう答えた。  
「今は何にもしたくないんで……それより、腹が痛くなってきたから帰るわ」  
「えっ……あつ、お大事に」  
「お金ここに置いておくんで。じゃあな」  
そう言つて秀二は帰つていった。  
「ごめんね」  
「何がですか？」  
「普段のあの人はすごくいい人なんですよ」  
「気にしていません。それにあの人の気持ちはよく分かります」  
「そうか」

その頃ある空き家で数人の若者達が集まっていた。  
「3代目の名前と伝説はよく聞けぞ」  
集まっていたのは、新見たち3人と芹沢と摩利支天のメンバー数人であつた。  
「で、沖田つて奴に焼入れてやりたいんだな」  
「はい。野郎にやられ、女を取られたんですから」  
「でも沖田強<sup>そいつ</sup>いんだろつ」  
「は、はい」  
「しかも、3代目の知り合い……それなりの報酬は貰つぞ」  
「はい」  
「よし。お前の由紀子<sup>おんな</sup>を使って沖田をここに連れて来い」  
「分かりました」

夕方……

沖田が夜、空手があるため、二人は別れた。

「気をつけて帰るんだよ」

「はい。今日はいろいろありがとうございます」

「じゃあ」

二人が分かれてしばらくしたところで、由紀子の前に新見が現れた。

「な、何の用？」

「ちょっと話があつてさ」

「悪いけど急いでいるの」

「まあ、聞けよ。おとなしく言う事聞かないと、家に火を点けるぞ」

「……分かったわ」

「よし。じゃあ、着いて来い」

由紀子が拉致された。

その頃沖田は、道着に着替え、道場へ向かっていた。

すると途中で、同じく道場へ向かっている内気と出会った。

「押忍！沖田さん」

武道の世界は上下関係が厳しい。

年は内気の方が上なのだが、帯は沖田の方が上。

そのため、彼は沖田に敬語で話している。

また、秀二も現役時代は沖田に敬語で話していた。

「そういえば、内気さんの病気ってクローン病と似ているんですね？」

「似ているわけではないですけど、同じ腸の特定疾患ではあります」

「そうか。僕の友達にもクローン病がいてね」

二人が会話をしながら道場に向かう途中、沖田の携帯が鳴った。

「ゆきちゃんからだ」

沖田は携帯に出ると、電話の声は由紀子ではなく、新見であった。

「お前、ゆきちゃんに何かしたのか？」

「いや、まだしていない。だが、お前の態度しだいではどうなるかわからない」

「俺にどうしろと？」

「今からいう場所へ一人で来い」

「分かった」

沖田は指示された場所へ向か決意をした。

「沖田さん、お友達に何かあったのですか？」

「内気さん、誰にも言わないでくださいね」

「で、でも」

「大丈夫ですよ。それより早く行かないと遅れるよ」

「ですが」

「（破門されるかもしれない。だが、ゆきちゃんを助けに行かなくちゃ）

彼は由紀子を助けに向かった。

「沖田さ〜ん!!!」

内気が大声で呼んだが、沖田の耳には届かなかった。

内気はどうすればいいのか悩みながら道場へ来た。

だが、すでに練習は始まっていた。

館長の命令で、北斗が彼を怒った。

内気は決心し、遅刻した理由を話した。

「どうだトシ？繋がったか？」

「ダメです。それにしても沖田が無断で休むなんて、何かあったのかも」

「その通りですぜ。土方さん」

と、北斗が言った。

北斗は内気から聞いたことと、昨日の出来事を話した。

「原田、永倉、二人で指導続ける」

「押忍！」

「内気、本来なら腕立て100回だが、今日は50回で許してやる」  
「押忍！遅刻して本当にすみませんでした」

「北斗、トシ、外に行くぞ」

「押忍！」

三人は道場の外に出た。

「北斗、お前がいたチームの奴がバツクにいるんだろう。たまり場はどこだ」

「時代が違いますから、今、あいつらがどこで集まっているのかわかりません。ただ、ファミレスによく来ているみたいですが……呼び出したということは、沖田に復讐するつもり……大勢の人がいる場所ですすがにやらないと思います」

「そうか。よし。昔の不良より今の不良の方がいろいろと知っているだろう。トシ、山崎を呼んで来い」

「押忍！」

「まったく新戦会に喧嘩を売るとはいい度胸だな」

「ただの馬鹿ですよ」

「じゃあ、居場所が分かったら、お前がその馬鹿共に礼儀を教えてやれ」

「押忍！」

北斗は薄っすらと笑った。

多くの修羅場を潜ってきた修羅だからこそ、暴れられるのが嬉しいのだ。

「館長、山崎を連れてきました」

「うむ。山崎、お前、新見って奴知っているか？」

「新見ですか……下の名前は分かりますか？」

「知らん。なら芹沢という今、摩利支天の頭を張っている奴は知っているか？」

「摩利支天なら、自分より北斗さんのほうが詳しいのでは？」

「時代が違つらしい。だから昔の不良よりも今の不良のお前の方が詳しいと思つてな」

「ちょっと、悪友に電話してもいいですか？もしかしたら誰か知っているかもしれせん」

「ああ、頼んだぞ」

その頃沖田は芹沢たちのたまり場である空き家の前にいた。

「ここか」

バキッ！

とドアを蹴破り中に入った。

するとたくさん懐中電灯が照らされた。

そして、新見たち3人と芹沢と20人の摩利支天のメンバー、さらに両手を縛られ、床に座らされている由紀子もいた。

「沖田君！」

「ゆきちゃん、もう大丈夫だよ。おい、約束どおり来たんだ。ゆきちゃんは返してやれ」

「それは出来んな」

と新見が言った。

「彼女は病気を抱えているんだ。ストレスや不安で体調が悪くなったらどうするんだ」

「そんなの知った事か」

「何！」

「由紀子は俺達の切り札。お前は今から俺達にボコられるんだ。抵抗しても構わんが、由紀子がどうなっても知らんぞ」

「クッ……」

「沖田君、私は大丈夫だから、こいつらをやつつけて」

「……ゆきちゃん、ありがとう。さあ、ボコれよ！僕は手を出さないから」

「いい度胸だ。さすが武道をやっているだけの事はあるな」

そういったのは芹沢だ。

「殺れ！」

「おお！！」

20人の男達が沖田に襲い掛かった。

その頃新戦会では、ようやく芹沢たちのたまり場が分かった。

「じゃあ、自分行つてきます」

「ああ、だが、殺すなよ」

「押忍！」

沖田が空き家に入って2時間の時が流れた。

沖田ボコボコにされても一度も倒れることはなかった。

「ば、化け物か」

「ぺっ……てめーらの攻撃なんて、館長や土方さんの攻撃に比べればたいしたことない」

「そうかよ。おい、カメラ回せ」

「……？」

「お前をボコつても面白くないのが分かった。だから、お前の目の前で、由紀子おんなを犯してやる。そして、DVDにして高い値段で売ってやるぜ」

「約束が違うぞ！」

「俺達がそんなもの守ると思うか」

「やめろ〜！」

「じゃあ、まず元彼の俺から」

「馬鹿、俺が先に決まっているだろう」

「すいません。芹沢さん」

芹沢はまず激しくキスをしてきた。

「（嫌……）」

「お前ら殺す！」

沖田が本気で怒った。

だがその時、北斗がたどり着いた。

「沖田、悪いが館長からこいつらに礼儀を教えてこいと言われてるんだ」

「北斗さん」

「アンタが3代目か」

「お前が芹沢か」

「ああ、そうツスよ」

「お前らは摩利支天の名前と伝統に傷をつけやがった。さらに、沖田を傷つけ、由紀子も傷つけた。新戦会の者として、そして摩利支天OBとして、お前らに礼儀を教えてやるよ」

「や、殺れ！」

「摩利支天の本当の意味を教えてやるよ」

「そっいいながら、紙一重で交わす。」

「摩利支天は、武士の守護神ものぶなんだよ」

「そっいいながら、今度は攻撃を仕掛けた。」

「そしてたった数分で20人を立てないようにした。」

「残るのは新見たち3人と芹沢だけだ。」

「沖田、芹沢と新見はお前がやれ」

「押忍！」

「くそつたれ！」

と新見が襲い掛かるが、沖田の上段回し蹴りが決まった。

「ぐわ〜」

そして、芹沢に向かっていった。

「おい、お前ら行けよ」

芹沢は残った新見の仲間二人にそう言った。

「む、無理ツスよ」

「チツ……役立たず共が」

「そう言つて、ナイフを出した。」

「が、すでに沖田は、芹沢の間合いに入っていた。」

「そして気を失わない程度に殴った。」

「ぐわ〜」

「お前には生き地獄を味合わせてやる」

「そう言つて、気絶しない程度のパンチを9発喰らわせた。」

「そして最後に、由紀子を傷つけた分の、怒りの籠った正拳突きを喰らわせた。」

「ハアハア……」

「沖田君大丈夫？」

「僕は大丈夫だよ。それより君を守れなくてすまない」

「そんなことないです。私のためにここまでしてくれた人なんて今までいなかった。だから、悔しさよりも嬉しさでいっぱい」

「そうか」

「良かったなお前ら」

「押忍！北斗さんありがとうございました」

「でも、お前は喜んでいられないぞ。勝手にこんな事したんだ。破門にはならんが、館長を含め、黒帯全員から一人十発づつの下段蹴りの刑が待っているから」

「うっ……」

地獄の押し置きが待っているが、由紀子を無事に取り戻した沖田。そんな沖田に由紀子は本気でときめいていた。

### 第3話 修羅場（後書き）

どうも生時です^^

僕は物語の中で格闘技をやり続けるため、今回の話も格闘モノにな  
ってしまいました。

この物語は秀二が主人公だから、次からは彼を活躍させます。

## 第4話　ときめき

あの事件の由紀子は心に大きな心の傷がついたが、沖田のおかげで立ち直った。

そしてあの事件から3週間が経った。

由紀子は「生きる目標」のため、音楽を結成させようと、メンバーを探していた。

昔館長から音楽を教えてもらっていた時に、秀二や他の弟子たちでバンドを結成したが、秀二も含め、バンドそのメンバー達は皆会を脱退していた。

だが、由紀子は沖田の強力で、ヴォーカル以外のメンバーを集める事ができた。

ギターは由紀子

ベースは山崎

ドラムは「アルテミス」というV系バンドのドラムを担当している秀二の弟、修三がサポートで参加することが決まった。

沖田や3人のメンバーはいつものファミレスで、話し合いをしていた。

「やっぱヴォーカルは秀二さんしかない。修三君、秀二に君から頼んでみてよ」

「押忍！ただ、最近兄の様子が変なんですけど」

「変？」

「ほんの少し前まで無気力だったのに、最近はまた明るくなったんです」

「それはいいことだよ。あの人は今まで落ち込み、そして這い上がってきたんだから」

「とりあえずヴォーカルの事、兄に話ときます」

「頼むよ」

「で、オリジナルをやるんですか？それともコピーですか？」  
山崎が聞いた。

「まずはコピーでいいんじゃない。ルナシーとかなら修三君もゆきちちゃんも好きだし、秀二も好きなバンドだ。ルナシーのコピーをやってみたら？」

「僕はいいですよ。アルテミスでもロージアとか演奏しているから  
私も賛成」

「山崎君は？」

「いいですよ。ルナシーは僕も好きですから」

その頃秀二は家でブログを書いていた。  
ハンドルネームは「生きる時」

今日のブログのタイトルは「ときめき」

どうも生きる時です^^

やはり僕はあの子に恋をしているみたいなんだ。

あの子がうちの会社にバイトで入ってから、仕事が楽しい(^^)  
今日はその子が入っていないけど、でもその子のおかげで、生きる  
目標ができた。

病気の痛みや恐怖に負けて、また世の中が嫌になっていたけど、  
も今は楽しいよ。

何とか友達になりたいぜ！

じゃあ、今日も仕事に行ってきます。

ではノシ

どうやら秀二は3週間前に入社した女の子に恋をしているようだ。  
そして秀二は仕事に出かけた。

6時間後、秀二はバイトから帰ってすぐにブログを見た。するとコメントが一件届いていた。

ハンドルネームは「ルナ」

半年前から秀二のブログにコメントをし、秀二の数少ないブログ仲間だ。

生きる時さんこんにちは^^

私も恋をしたいよ（涙）

もう4年も彼氏がいない><

秀二さんの恋がうまく行くといいですね。

ルナ

秀二はすぐに返事を書いた。

ルナさんどうもです^^

ルナさんに彼氏がないのは驚きです！

優しいから絶対いると思っっていたんだが……

恋がうまくいくかわからないけど頑張ります。

好きな人ができ、生きる気力を取り戻した秀二。

果たして彼の恋はうまく行くのか？

しばらくすると、また一件コメントが届いた。

ハンドルネームは「武蔵」

生きる時さん、はじめまして^^

武蔵といます。

自分の知り合いにもクローン病患者がいるから、病気の大変さは少しは分かります。

あなたの小説を何作か読みました。  
病気で格闘技がやれなくなっても、物語の中で格闘技を続けているのはすごい事だと思います。  
また、「祈り」の動画も見ました。  
これからも応援しています。  
恋愛うまくいくといいですね。

武蔵のコメントを読んで、秀二は嬉しくて、泪まで流した。  
ルナや武蔵のように自分を応援してくれる人がいる事に励まされる秀二であった。

## おまけ 新戦会空手のキャラデータ

新戦会は後藤勇が作り上げた実戦空手である。

名前：後藤勇

年齢：49歳

役職：館長

帯の色：黒

級又は段：5段

本職：創建会社の社員

格闘技：伝統空手、フルコンタクト空手、実戦空手道新戦会

空手暦：伝統空手が6年、フルコンタクト空手が9年、新戦会が2

3年で合計38年

その他：幼い頃から伝統空手（糸東流）を学んでいた。

中学の時は不良で喧嘩ばかりしていた。

そんな時、40代の男性とモメ事が起きた。

今まで負けず知らずの彼が、その男性の気迫に負けた。

その男性はフルコンタクト空手の館長であった。

そして、勇にこう言った「真の強さを手に入れたくはないか？」

その言葉の意味を知るため、勇は16歳の時に彼の弟子となった。

だが、勇が25歳の時、師匠である館長と意見の違いから、袂を別ち合い、26歳の時に新戦会空手を結成した（その後、師匠とは和解し、現在では勇が尊敬する武道家の1人である）

29歳の時に結婚したが、半年で離婚。

その後35歳の時に再婚し、子供も長男長女の二人いる（長男は8歳で、少年の部にいる。長女は4歳で同じく少年の部にいる）

名前：土方歳夫

年齢：39歳

役職：師範及び四天王の一人  
帯の色：黒

級又は段：4段

本職：館長と同じ創建会社の社員

格闘技：柔道、剣道、合気道、空手道

空手暦：20年

その他：幼い頃から剣道や柔道、合気道などを学んでいた。

18歳の時館長が勤務している創建会社に入社。

19歳の時に、館長から進められ、入門した。

硬派で格闘一筋と思われがちだが、意外にもゲームや漫画、アニメが好きである。

32歳の時に結婚したが、子供はいない。

名前：永倉新一

年齢：40歳

役職：指導員及び四天王の一人

帯の色：黒

級又は段：3段

本職：薬剤師

格闘技：少林寺拳法、合気道、空手道

空手暦：17年

その他：幼い頃からブルース・リーに憧れ、少林寺や合気道を学んでいた。

一人暮らしをしていた頃、近所には土方が住んでおり、彼の勧めで23歳の時に入門。

映画が好きで秀二の勤めている映画館にも一度来たが、映画館が汚いため一度しか行っていない。

また、ある日、映画を観終え、帰ろうとしたとき、4人のチンピラに絡まれたが、眼力と気迫で、チンピラどもは逃げていった。

38歳の時に結婚し、39歳の時に男児を授かった。

名前：原田光介

年齢：36歳

役職：指導員及び四天王の一人

帯の色：黒

級及び段：3段

本職：中華料理店の亭主

格闘技：ボクシング、空手

空手暦：18年

その他：北斗とは幼馴染で、族には入っていないがかなりの不良<sup>ヤンキー</sup>であった。

中学の時に、ボクシングをやっていたが、1年で辞めてしまう。

実家は中華料理屋で、店にお客として来ていた後藤や土方に惚れこんで18歳の時に入門した。

30歳の時に結婚。

土方同様子供はいないが、愛妻家である。

名前：沖田一

年齢：27歳

役職：指導員（主に少年の部と女子の部）及び四天王の一人  
帯の色：黒

級及び段：3段

本職：フリーターでレンタル屋でバイトをしている。

格闘技：我流剣術、空手

空手暦：18年

その他：幼い頃は泣き虫で、いじめられていたため、9歳のときに、親が近所にあつた新戦会に入門させた。

子供好きで、秀二の弟から「保育士になりませんか？」といわれた

が、本人は保育士になる気がない。  
天性の持ち主と強くなりたいたいという思いから、かなりの努力をし、四天王の中で一番若いのに、実力は後藤、土方の次に強い。  
結婚はしていない。秋田由紀子は元カノである。

名前：神威北斗

年齢：36歳

役職：指導員

帯の色：黒

級及び段：2段

本職：木材工場の工場長

格闘技：我流喧嘩殺法、空手

空手暦：17年

その他：原田とは幼馴染で、暴走族「摩利支天」三代目総長。

19歳の時に原田の勧めで入門。

妻は秀二の初恋の相手で、看護師の神威美奈子（旧姓は早乙女）だが、彼女は2007年に病死した。

名前：河村秀二

年齢：31歳

役職：現役時代は少年の部の指導補佐

帯の色：色帯だが、指導員補佐ということで、途中から黒帯を締め  
ている。

級及び段：5級くらいで引退

本職：フリータで映画の世界の案内人

格闘技：少林寺拳法、空手

空手暦：7年

その他：幼い頃から格闘技が好きで、小学生の時に短期間だが、父と兄が通っていた道場入門。

18歳の時にパン工場に就職をするがクローン病と診断されてしま

う。

退院後、弟が通っていた新戦会に入門。

だが、25の時に脱退。

亡き友たちのために自主制作CD-R「祈り」を配布、販売したことがある。

また、ネット作家としても活動している。

好きなミュージシャンは「ルナシー」と「マリスミゼル」

好きな俳優は「ジャッキー・チェン」と「ブルース・リー」

好きなアニメは「ドラゴンボール」と「ドラえもん」

好きな女性のタイプは「新・キューティーハニー」の如月ハニー。

名前：河村秀三

年齢：22歳

役職：少年の部の指導

帯の色：黒

級及び段：初段

本職：保育士

格闘技：空手

空手暦：12年

その他：秀二の弟。子供好きで保育士をしている（ちなみに長男秀一も保育士で、奥さんも元保育士である）

父や兄達が少林寺拳法を学んでいた影響で、彼も10歳の時に空手に入門した。

名前：内気真

年齢：28歳

役職：なし

帯の色：茶

級及び段：2級

本職：フリーターでスーパーでバイトをしている。

格闘技：空手

空手暦：6年

その他：潰瘍性大腸炎という難病患者。

秀二に励まされ、生きる目標を見つけるため、22歳の時に秀二が通っていた新戦会に入門。

名前：山崎進

年齢：18歳

役職：なし

帯の色：色帯

級及び段：6級

本職：北斗が工場長を務めている木材工場でアルバイトをしている。

格闘技：空手

空手暦：1年

その他：現役の不良で、16歳の時に木材工場にアルバイトとして入社。

17歳の時に北斗に憧れ入門した。

名前：後藤武

年齢：8歳

役職：少年の部のリーダー

帯の色：緑

級及び段：3級

本職：小学生

格闘技：空手

空手暦：5年

その他：館長の子供（長男）で、今のところ本編には登場していない（今後登場するかは未定）

3歳の時に入門。

緑帯だが、すでに茶帯の実力はある。

だが、館長の息子であるため、他の少年達より厳しく査定される。  
稽古のときは当然、父勇を館長と呼び、敬語で話す。

名前：後藤舞

年齢：4歳

役職：なし

帯の色：白

級及び段：8級

本職：幼稚園児

格闘技：空手

空手暦：半年

その他：武と同じく館長の子供（長女）で、今のところ彼女も本編には登場していない（今後登場するかは未定）

3歳の時に入門。

武同様、幼いとはいえ、稽古中は館長と呼び、敬語で話す。

## 第5話 彼女のフルネーム

某日……

沖田、由紀子、山崎、秀三はいつものファミレスにいた。さらに北斗もやってきた。

「どうやら彼をヴォーカルにするようだ。」

「秀二が恋をしているのは本当か？沖田」

「押忍！秀二さんのブログ読みましたから」

実は「武蔵」というハンドルネームで、秀二に励ましのコメントをしたのは、沖田であった。

「しかも職場恋愛か」

「どつりで、この頃、兄ちゃんが、楽しそくに仕事に行く訳だ」

「このことは、秀二さんには内緒ですよ」

「分かってる」

「さて、本題に入りましょうか。まずバンド名はダイアナでいいですね」

「ああ」

「自分もそれでいいです」

「私も」

「アルテミスにダイアナか……ルナシーのコピーをやるにはいいバンド名です」

秀三はアルテミスというバンドに所属しており、ダイアナにはヘルプでサポートドラムをやることとなっていた。

その頃、秀二はバイト先の映画館にいた。

今日は彼女もいる日だ。

彼女の上の名は如月で、年は27歳だ。

「やっぱり綺麗だな如月さんは……下の名前を知りたいが、堂々と名

札を見ることができん」

その時

「どうしました河村さん」

と、如月が話しかけてきた。

「えっ！いや、仕事覚えがいいですね」

「そんなことないです」

「（名札を見るチャンスだ！）」

ふと、秀二は彼女の名札を見た。

そして驚いた。

「如月さんの下の名前、美奈子っていうんですか」

「はい、そうです」

彼女の下の名前は美奈子。

秀二の初恋の相手で北斗の亡き妻と同じ名前であった。

「河村さんは秀二さんというんですね」

「えっ！？うん、河村より秀二で呼んでよ」

「あっ！？はい」

「（ちよつと馴れ馴れしかったかな……）」

仕事終え、帰宅した秀二はブログを書いた。

タイトルは「彼女の名前」

生きる時です^^

今日彼女のフルネームを知っちゃった！

なんと下の名前が、僕の初恋の人と同じ名前だった。

その人とはうまくいかなかったけど……

もつともつと仲良くなりたい。

彼女と一つになりたいな

ではノシ

ブログを書き終えた秀二は、ルナシーの昔のライブをネット動画で見っていた。

それから3時間後……

ルナからコメントが届いていた。

生きる時さん、どうもです^^

初恋の人と同じ名前とは驚きですね（もしかしたらその人が運命の人かもね）

前はうまく行かなかったけど、今度はうまく行くといいね（^^）でも焦っちゃダメだよ。

ではまた

秀二はすぐに返事を書いた。

ルナさんどうもです^^

いつも励ましのコメありがとうね。

焦らないようにゆっくりと頑張ります。

まずは職場仲間から、友達になってもらう。

そして告白してみます。

ではノシ

それから30分後……

今度は武蔵（沖田）からコメントが届いた。

生きる時さん、ちわっす！

告白する時に一つになりたいなんて言っちゃダメだよ。

とにかく応援しています。

「ありがたいね〜ホント嬉しいよ。真奈ちゃんも応援してくれてるかな？」

今は亡き秀二の彼女、真奈の写真を見てそう呟いた。

果たして彼の恋愛はうまくいくのだろうか？

そして新戦会にある事件が起きようとしていることを、今は誰も知らない。

## 第5話 彼女のフルネーム（後書き）

どうも生時です^^

「生時のコメディー短編集」を更新しましたので、良かったら読んでください！

## 第6話 ルナの正体は義姉!?

生きる活力を取り戻した秀二は、久々に小説を書こうとネタ探しに漫画喫茶へ入った。

「いらつしゃいませ!お時間は何分ですか?」

「90分で」

「はい、延長されますと10分に付き」

「分かっている」

「はい、ではドリンクの方はそちらにありますので」

「ああ」

秀二が空いている、席を探していると、聞いたことのある声が聞こえた。

「一つになりたいって、何か書いてんだよ。アイツは」

「声が大きいですよ。北斗さん」

なんと、店には北斗と沖田が来ていた。

「あれ!北斗さんに沖田君じゃないですか!」

「おお、秀二!!」

ふと、二人が見ていたパソコンの画面を見ると、秀二のブログが映っていた。

「これ、僕のブログ!」

「いや、お前の小説を検索していたら、こんなの見つけてしまった」

「なんか、知り合いに見られると恥ずかしいですね」

「秀二。沖田がコメしたように、告白で一つになりたいなんていうなよ」

「北斗さん!」

「あつ!うつかりしゃべっちゃった」

「えっ?もしかして、この武蔵って、沖田君なの?」

「はい。少しでも励みになればと思い」

「そうか。ありがとう……あっ！（まさか……）」  
ふと秀二はルナも自分の身内の者ではないかと思い始めた。

「どうした秀二？」

「いや、このルナという人もしかしたら、兄の奥さん……僕にとっ  
ては義理の姉かもしれませぬ」

「そうなのか？」

「義姉の名前が瑠奈なんですよ。だから義姉かも……だとしたら恥  
ずかしいな」

「まあ、いいじゃないか」

その時、あの美奈子が店に入ってきたのだ。

「み、美奈子さん」

「どうした？知り合いか？」

「あ、あの人が僕の好きな人です」

「マジかよ。けっこう可愛いじゃんかよ。ん？お前今美奈子さんっ  
ていったよな」

「あっ！」

「このブログでは、お前の好きな彼女の名前って、初恋の人と同じ  
なんだろう。だから真奈ちゃんかと思っただけ」

秀二の初恋の相手が北斗の亡き妻であることを、北斗も沖田も知ら  
ない。

「あれですよ。ほら、前に学生時代の初恋の相手がアニメのキャラ  
だっけ言っただじゃないですか。そのキャラの名前も美奈子さんなん  
です」

「ああ、なるほど」

「（焦った……いや、それより彼女とこんなところで会えるなんて…  
…）」

「邪魔しないから、行って来い。仲良くなれるチャンスだぞ」

「お、押忍！」

「頑張れよ。恋愛も真剣勝負だ。男なら行って来い」

「押忍！いつてきます」

「秀二さん、焦っちゃダメですからね」

「押忍！」

そして秀二は美奈子の席へ向かった。

「あれ、美奈子さんじゃないですか！」

「あつ、河、いえ、秀二さん」

「美奈子さんも漫画喫茶に来るんですね。漫画とか読まないと思っ  
ていました」

「いえ、パソコンを使いたくて……家のパソコン壊れてしまいまし  
たので……」

「そうですか」

「でも、漫画も好きですよ」

と、笑顔で答えた。

「（美しい……こうやっているだけで何故か緊張してきた）」

「今ね。ブログ仲間の人が恋をしているみたいだから、励ましてあ  
げているの」

「そうなんだ（優しいなあ〜ますます惚れてしまう）」

「その人は難病を抱えながら、格闘技や音楽をやっていたらしいの  
で、今は小説を書いて、物語の中で格闘技を続けているみたいなの  
」

「えっ？」

「しかも、亡くなった彼女やお友達のために曲を作って、CDにし  
て配布、販売してみたなの」

「（おい〜！これって間違いなく俺のブログのことじゃない……て  
ことは、ルナさんって、もしかして美奈子さんだったのか〜）」

「私の彼も4年前に病気で亡くなったの」

そのときの彼女の顔はすごく悲しい顔をしていた。

彼女にとって、その彼氏は本当に大切な人だったんだと、秀二は思  
った。

「その人にとって、彼女さんはすごく大切な方だったみたいだけど、  
新しく恋を見つけたようだから、応援してあげているの」

「（美奈子さん……）」

秀二は、自分がそのブログを書いていると美奈子に伝える決意をした。

「あ的美奈子さん」

「ねえねえ、ここ読んでみて」

「えっ……（早く言え秀二<sup>おれ</sup>）」

「一つになりたい。何て書いてあるでしょう。焦って失敗しないといいのだけど」

「（うっ……よけいな事書いてしまった。これじゃあ、ブログを書いているのは僕ですつていけない）」

「武蔵さんって方からも告白の時に一つになりたいなんて告白したらダメですよ。って、アドバイスされている」

「一つになりたいくらい、彼女の事が好きなんでしょうね。女性の方からすれば、いやらしいコメですが、その気持ち男の僕なら分かります（自分で自分をフォローしなくては……）」

「確かに好きな人と一つになりたいというのは分かるけど、気持ちが焦っているのよね。それで、失敗しなければいいのだけれど……」

まあ、私の方こそ、新しい恋を探さなければいけないのだけだね」

「美奈子さん、優しいし、綺麗だから、すぐ出来ますよ」

「クスッ。お世辞言っても何もでないわよ」

「いや、ホントです。僕がもう少しいい男だったら、告白するな」

「え〜本当」

「（本当なんだよ）」

「でも私は秀二さん、いい男だと思いますよ。後輩にも優しいし」

「そ、そう……じゃあ、告白しようかな〜」

「そ、それ、本気？」

「……くだらない冗談を言ってごめん。僕もいい人探しますから、お互い頑張りましょう。じゃあ、僕、あそこの席に座って漫画読んでいるから……」

「秀二さん……」

秀二はしばらく漫画を読み、帰る前に、北斗と沖田に挨拶をしに彼

らの席へ向かった。

「どうだった？」

「ルナさんが誰か分かりました」

「おい、まさか、あの子か？」

「はい……自分もう帰りますから」

「元気ないが、大丈夫か？」

「大丈夫です。ちょっとお腹が痛くなってきただけです」

「そうか」

「では失礼します」

その後、美奈子にも挨拶をした。

「じゃあ、僕帰るから」

「もう帰るんですか？」

「うん。用事を思い出したから」

そう言って店を出た。

帰宅して彼はブログを更新した。

タイトル「偶然」

どうも生きる時です^^

今日小説のネタを探しに図書館に行ってきました。

そしたら、なんと、空手の先輩達と出会いました。

さらに、職場仲間にまで出会いました。

結局、小説のネタは思いつきませんでした

ではノシ

それから4時間後……

1件のコメントが届いていた。

だがそれはルナではなく武蔵（沖田）からであった。

生きる時さん、どうもです！

さすが作家ですね。

図書館ですか！

実は僕も今日、先輩と漫喫に行ったら、知り合いに会ったんですよ。では小説頑張ってください。

「沖田は励ましてくれているのか、からかっているのかどっちなんだよ」

ちなみにこのコメントを書いたのは沖田ではなく、北斗であった。

「今日はルナさん……いや、美奈子さんからコメント来ないな」

結局その日、彼女からコメントは届かなかった。

そして、新戦会にある事件が起きようとしていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3698y/>

---

クローン病に負けるな！

2011年11月18日05時51分発行